

## 夏の終わりに―「ジェネラティビティ」を支える地域社会

神藤 貴昭(本学教職研究科教授 教育心理学)

残暑は厳しいですが、夏が終わりつつあります。今年の京都の夏は、3年ぶりに、祇園祭の山鉾巡行が行われました。とくに子どもたちにとっては、3年という時間は長く、家の近所(京都市内)の小学生たちが、山鉾巡行をはじめて見に行き、大変感動して帰ってきました。

子どもたちにとって、夏と言えば夏休みですが、その期間は、「地域で育つ」という側面が強くなるでしょう。夏休みには、地域の公園や友人の家などで遊ぶ機会が増えるだけでなく、様々な地域の行事や祭礼に参加する機会も多くなるかと思います。

京都市内では、地蔵盆が盛んです。2020年、21年と、コロナ禍で、地蔵盆も中止や規模縮小を余儀なくされました。地蔵盆の規模は町によって異なりますが、大人たちも、子どもたちも、お地蔵さんにお参ります。子どもたちは、お菓子をもらったり、景品付きのゲームなどを行ったりもします。地蔵の前で子どもが遊ぶことが、この行事にとって大事なのです。

町内会で、地蔵盆の係になると、子どもたちをどう楽しませるかということを考えなければなりません。日頃は忙しい近隣の人同士も、地蔵盆をどうするかについて、会合をしますが、むしろ、地蔵盆以外の世間話や情報交換をする場ともなっています。

和崎春日著『大文字の都市人類学的研究―左大文字を中心として―』が示したように、祭礼や行事においては、多かれ少なかれ、子どもや若者が、一人前になるしくみ、地域の人たちがもつ世界観を身につけていくしくみが備わっています。

私の地元の町(大阪の泉州地方)では、私が生まれるだいぶ前に、地車(だんじり)が川に落ちて、修理できなくなり、その後は、地車祭がなくなってしまったので、少々淋しい思いをしていました。それでも、親や親せきに連れられて、あるいは、岸和田あたりの友人と一緒に、地車を見に行き、自分は泉州地域の間人だという感覚を得ました。

ところで、話が飛ぶようですが、学校はなんのためにあるのか、という問いの答えは(いろいろあるでしょうが)、子どもが、社会において一人前になるためにある、といえるでしょう。

子どもが、一人前になるためには、子どもを、大人側、あるいは連綿と続く人間社会の時間と空間の中に引っ張りこむ力、あるいは包み込むような力が必要です。いわば「正統的周辺参加」を可能にするような力です。これは学校だけの仕事ではないでしょう。様々な伝統的な行事や祭礼は、そのような力を生み出す装置のひとつともいえるのではないのでしょうか。

心理学者のエリクソン(Erikson, E.H.)は、次世代に関心を持ち、次世代を育てるということが、成人期における発達課題であると考え、このような心性を「ジェネラティビティ」(世代性、などと訳される)と呼びました(狙ったわけではないですが、奇しくも、前回のコラム(NO.10)と同じく、「ジェネラティビティ」の概念に行きついてしまいました)。

「ジェネラティビティ」は、たんに年下を世話するということをあらわすだけの概念ではなく、大人と子ども、年上と年下が相互行為の中で、より豊かに成熟してゆく様をあらわします。

地域全体で、大人の「ジェネラティビティ」の気持ち満ちたり、あるいは生成したりするしくみが、行事や祭礼には備わっているといえるのかもしれませんが。

そう考えると、コロナ禍での行事や祭礼の中断は、「ジェネラティビティ」が発現する豊かな時間を奪ってしまっていたともいえます。

先日、ある京都市内の小学校の授業で、「人々はなぜ祭りをするのだろうか?」ということを考え探究する授業を見学させていただく機会を得ました。小学生たちは、久しぶりの祇園祭の山鉾巡行に触発され、先人たち、地域の人たちのさまざまな想いに、考えを巡らせていました。大人や先人が子どもを包み込み、子どもがそこに飛び込む様をみたような気がしました。